

西川 朋子氏

上智大学を卒業後、人材系ベンチャー、出版社の企画営業等に従事。2014年より「トビタテ! 留学JAPAN」の広報、2018年より文科省広報戦略アドバイザーを務める。



お話を聞いたのは

大西 好宣氏

慶應義塾大学卒業後、NHK、国連職員、大阪大学教授等を経て現職。社会人を経験後、米国コロンビア大学とタイのチュラロンコン大学の2つの大学院で留学を経験。



お話を聞いたのは

メリットは? グローバルな学びのイマ

実際
どうなの?

海外での学びには多くのメリットがあります。留学に詳しい専門家や、グローバル教育を受ける先輩、現役の留学生にお話を聞きました。

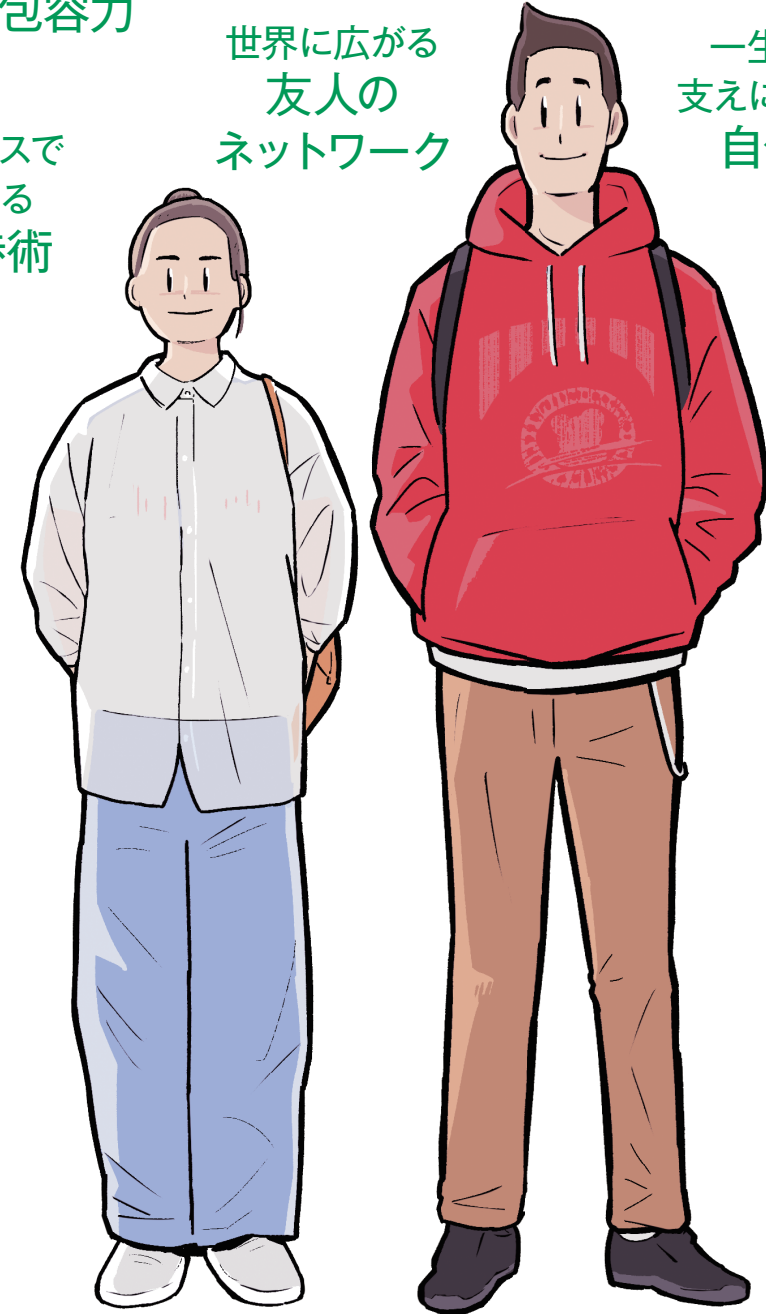
世界中が活躍の舞台に

一生の支えになる自信

世界に広がる友人のネットワーク

異文化を理解する包容力

ビジネスで活きる交渉術



メリット1 世界が活躍の舞台になる

日本の大学数約800校に対して、アメリカは約4000校。世界にまで視野を広げると大学選びの幅は広がります。職業選びについても同様で、活躍の場は世界中に開かれます。

「少なくとも英語ができれば、日本に限らず活躍の場が広がり、世界中が自分の舞台になります。ひょっとすると結婚相手の選択肢も変わってくるかもしれません。自分の人生が全然違ってきます」(大西氏)

メリット2 友人のネットワークが世界に広がる

留学で得られる外国人の友人は、大きな財産になります。特に大学留学で知り合った友人は、卒業後に世界中に散らばることが多いため、ネットワークが世界中に広がります。「私の経験では、社会人になって世界で働いていて、同じ学び舎出身の人と偶然出会い、仲良くなることがあります。大学のつながりで、人脈が世界中に広がるのです。仕事上の情報交換をするなど、人脈は海外においても大切です」(大西氏)

メリット3 困難を乗り越えた経験が自信になる

見知らぬ土地での留学生活や英語でのデートなど、困難を乗り越える体験が、自信につながります。特に海外の大学は進級・卒業の条件が厳しいため、卒業時に得られる満足感・達成感、そこから得られる自信は人生の支えとなります」(大西氏)

メリット4 マイノリティになる経験ができる

日本の当たり前が海外では当たり前ではないという新鮮な驚きは、やはり海外に行かないと得られない体験です。自分がマイノリティになるという経験によって、自分の中で自分自身や日本の在り方が相対化されます。それは、世界と自分の距離を考えるきっかけになるはず。「優しくされた経験がある人は人に優しくできるように、マイノリティの立場を知ると同じ立場の人に優しくなれます」(大西氏)

留学にある大きなメリット 準備をして効果を最大に

大西 好宣氏

海外留学は日本とは違う文化、考え方、教育に触れる絶好の機会。留学による学習効果を研究する大西好宣氏にお話を聞きました。

短期・長期にかかわらず、学生のうちに一度は留学することをおすすめします。ただ、短期留学と長期留学では、メリットに違いがあるので留意を。異文化に触れたときの驚き(カルチャーショック)を体感するには、短期留学のほうが向いています。一方、長期留学は異文化に触れた驚きこそ最初のほうで消えてしましますが、その文化を自分に内在化させ、考え方として定着させるというメリットがあるのです。

日本人の留学生の半数以上は10日〜2週間程度のごく短い留学です。それでも、一度海外を知ること世界の出発点を身近に感じるようになり、言語力の未熟さを痛感したり、学びのモチベーションにつながる効果があります。

海外留学に向き不向きはありませんが、成長の度合いや心構えには一人ひとり違いがあります。そのため、留学に行くタイミングについては、考える必要があるでしょう。中学・高校の段階で準備ができて大学から留学する人もいれば、大学院から行く人もいます。語学的な準備と「やるぞー」という心構えができたときこそ、海外留学をするときなのです。

自分がどの状態にあるかを知るには、まずは海外に行ってみて、どう感じたかを知るのも一つの手段。一日も早く帰りたいと思ったのか、このままずっとここで勉強したいと思ったのか。そこで、ある程度の準備段階を確認できます。加えて、留学前の準備としては、家族との良好な関係も大切です。日本人は一般的に他国の人に比べて多

授業スタイルについて

9月に新学期が始まり、クリスマスや夏休みなどの長期休暇があるのが一般的。双方向型の授業が中心で、学生数が多い場合は、1対多数の講義形式もあります。アメリカは入学後1~2年は一般教養を学び、その後に専攻を決めるリベラルアーツ教育が特徴。イギリスは3年制が一般的で、入学時から専門分野を深く学びます。

入試方法について

海外の大学では、高校の成績やエッセイ、推薦状、英語力などを総合的に評価する「ホリスティック（包括的）審査」が一般的。「高校時代の成績や活動に加え、なぜこの大学で学びたいのかというストーリーを伝えることが大切」（西川氏）。オンラインで出願・書類提出が可能で、現地に赴く必要はほぼありません。

費用について

学費や生活費は国によって大きな差があり、為替レートでも変動します。一般にアメリカは多額の費用がかかり、ヨーロッパやアジアは比較的安価な傾向が。特にマレーシアなど経済発展の著しい国では、学費や生活費を抑えつつレベルの高い講義が受けられます。イギリスやオーストラリアの現地校があるのも魅力です。

卒業について

卒業を大きく左右するのが「GPA (Grade Point Average)」と呼ばれる数値。基準が厳しく設定されており、満たさない場合は再履修や落第、退学などの厳しい措置が待っています。「システムティックに勉強する環境が整っているのが海外の特徴」（西川氏）。厳しいハードルを乗り越えた経験は大きな自信につながります。

奨学金について

アメリカの名門大学に多いニードベース型奨学金は、世帯年収の額によって支給されます。「学費だけでなく、生活費や教材費などのサポートも受けられます」（西川氏）。学業成績やスポーツなどの卓越した能力・実績に基づいて支給さ

れるメリットベース型奨学金も。しかし、国によっては進学直前まで給付額が決まらないこともあるので要注意。日本でも、総額40万ドルを給付する東進の「海外大学留学制度」や、財団などによる支援制度も存在します。

広告



メリット5 世界に通用する交渉術が身につく

海外の大学の授業では、論理構成と交渉術を学ぶ比重が高いです。海外の大学を卒業した人はこのような授業を経て社会人となりますが、日本の大学ではそのような授業は少ないため、たとえば優秀な国内大学を出

ていても、グローバルな交渉の場面で歯が立たないことがよくあります。「世界中の異なる考え方の人々と渡り合っていくためには、論理的に話し、お互いの妥協点を探る交渉術が非常に大切です」（大西氏）

様性を受け入れることが苦手だと言われますが「家庭内で良好な会話のある子どもは、留学後に多様性を受け入れやすくなる」という調査結果があります。子どもにとって一番身近な異文化は家族です。家庭内で良い関係を築くことは、留学先の多様性を受け入れる素地になるのです。留学はグローバルな人財になるための第一歩ですが、さらに実りあるものにするためには、家庭内の会話から意識すると良いでしょう。

海外と日本の大学入試から卒業までの違い

——西川 朋子氏

では、海外の大学には、そもそもどのように進学するのでしょうか。トビタテ！留学JAPANの西川朋子氏にお話を聞きました。

海外の大学入試は、日本とは大きく異なります。たとえばアメリカの名門大学では、高校の成績やエッセイ、推薦状、共通テスト（SAT・ACT）、英語力の証明、課外活動の実績などが総合的に評価されます。また、入学時期は多くの欧米大学は9月なので、出願もそれに合わせて設定。早い大学で前年の11月、一般的には1月頃締め切られます。

さらに学部選択についても違いがあります。日本では高校の時点で文理選択を行い、大学入学時に学部を決めますが、アメリカでは、入学後

にリベラルアーツとして幅広い教科を学び、途中で専攻を決めるのが一般的。専攻を二つ持つ「ダブルメジャー」もめずらしくありません。

そして、入学以上に大変なのが卒業です。授業への出席や課題の提出は当然として、発言やレポートまで厳しく評価されます。特に重要なのが成績を数値化した「GPA」。基準を下回ると進級・卒業はできません。海外の大学では、夜遅くまで図書館で勉強するのが当たり前。大変ですが、学びに没頭したい人にとっては最高の環境でしょう。

学費についても、国や大学によってさまざまです。たとえばドイツでは、ハイデルベルク大学など公立大学の学費は無料。共済費として数万円が必要になるものの、生活費を含めて年間200万円ほどに抑えられます。一方、ハーバード大学（アメリカ）の2024年度の学費は約950万円（1ドル＝1150円換算の場合）。生活費を含めると年間約1300万円以上の金額が必要で、

経済的な不安を感じる人が多いですが、費用を理由にためらう必要はありません。豊富な奨学金制度や、比較的安価なコミュニティカレッジからの編入など、費用を抑える方法はさまざまあります。今のうちからリサーチして、学びの選択肢を増やしておくことが大切です。